

Title	むし歯の減少，その真実と課題
Author(s)	新谷，誠康
Journal	歯科学報，110(4)：i-
URL	http://hdl.handle.net/10130/1993
Right	

むし歯の減少，その真実と課題

新 谷 誠 康

今年、東京歯科大学は創立120周年を迎えた。まさしく、日本の歯科界のパイオニアであり、常に第一線で他を率いてきた存在である。日本小児歯科学会も再来年に創立50周年を迎える。ここにおいても、東京歯科大学は小児歯科学講座初代教授(現名誉教授)町田幸雄先生を中心に、その黎明期から他を率いてきた存在であった。日本全国の小児歯科に携わる歯科医師が、いわゆる『むし歯の洪水』に溺れるなかで、その対応のみならず、小児の成長発育に関する貴重なデータ集積を行い、今も燦然と輝く小児歯科学の基礎を築き上げられた講座の先達には頭が下がる思いである。日本の子どものむし歯も他の先進国に負けないぐらいにまで減少し、約半世紀に渡って小児歯科医療に心血を注いで来られた先輩たちにとっては感無量なのではなかろうか。

しかし、先輩の業績を受け継ぐ我々はこれで満足してはいけない。子どものむし歯は確かに減少した。「統計上の平均では」である。だが、これは齲蝕が少ない子どもの数が増加したため、重度の齲蝕に罹患した子どもが陰に隠れてしまっているためではなかろうか。今も口の中で『洪水』が起こっている子どもは決して少なくない。確かに、都市部ではむし歯の子どもを見ることはほとんどなくなった。その結果、この現象が日本全国に起こっているのだと勘違いしている方が多いことは遺憾である。現場では、齲蝕罹患の二極化が確実に起こっている。そして、小児歯科医は、低年齢時に広範囲の齲蝕を患った子どものほとんどが、成長期を通じて、さらには成人した後も齲蝕に悩まされているのを見てきている。彼らが一般の人の数倍は口腔衛生に気を使い、努力をしているにも関わらず、である。低年齢時にできあがった齲蝕活動性が高い口腔内環境は、その後も持病の如くその人につきまとう。「齲蝕の数は過去の齲蝕の数と相関する」「ミュータンスレンサ球菌の口腔内への定着時期が早ければ早いほど、その後の齲蝕が多い」といったエビデンスのある事実をまさに実感する時である。

厚生労働省の平成17年歯科疾患実態調査によると、確かに青年期までのDMFT指数は激減している。7歳で0.2、8歳で0.5、9-10歳で0.9、11歳が1.6、12歳で1.7である。この数字は調査ごとに減少しており、昭和62年の同調査と比較するとすべて約1/3の値になっている。しかし、十代~二十代を通じて、DMFT指数は小学校時代よりかなりのハイペースで確実に増え続ける。そして、二十代ですでにDMFT指数が0の人は全体の1割を下回る。つまり、保護者が作った良い環境が、保護者の手を離れると維持されなくなるのである。さらにそれを表わすように、成人以降、未処置の齲蝕を有する者は全体の4割を越えている。中年期のDMFT指数は減るどころか、現在でも増加している。日本人の齲蝕が減ったのは見せかけだけで、口腔衛生の概念が定着したとは言い難いかもしれない。

数年前に、学外で都内のある高名な先生に「齲蝕がこれだけ減少した時代に、齲蝕の話など意味をなさない。これからは摂食嚥下ですよ。」と言われたことがある。確かに摂食嚥下は本当に大切であるし、小児、障害児の摂食嚥下には積極的に関わっているつもりである。しかしながら、摂食嚥下の根本は何であろうか。自分で咀嚼し、飲み込むことであろう。このために一番大事な器官は歯である。齲蝕や歯周病はその歯を奪う。人の生涯を通じて、これらの疾患への罹りにくさを決めるのは、小児期に築き上げられた口腔内環境と十代における口腔衛生意識の確立であるといっても過言ではない。凶らずも、摂食嚥下リハビリテーションの成否を決める最初のキーポイントは小児期にあるのだ。入り口を間違えたら、最後まで良い環境には辿り着けないのである。将来のためにも、もっと、ずっと小児歯科に目を向けていただきたい。

(東京歯科大学小児歯科学講座 教授)